冬の寒空に

チェンキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬の寒空に

【Ｎコード】
Ｎ１１２８Ｌ

【作者名】
チェンキー

【あらすじ】
コンビニのバイトに勤しむ私に、相川という男が尋ねてくる。彼は村上という女性を知らないか、と訊いてきた。そして、彼女を口説くために協力をして欲しいのだと頼まれる。その時、私は相川の目的など知るはずも無かった。

出会いはコンビニで

コンビニの自動ドアが開くと、高音域の落ち着いたメロディーが流れる。
その音が鳴れば、客が行き来しているのは必然的なので、私は雑誌を並べる手を止め、自然と入り口に目をやった。そこには相川の姿がある。
「よう」仕事中にも関わらず、彼は私に話かけてきた。
相川は長身で長髪、相変わらず無精ひげを生やしている。年齢は二十代半ば、と聞いているが三十代後半に見えなくもなかった。
「何の用ですか？」
「おいおい、私は客だぞ。客ってのはな、何もしなくても店側から重宝される称号なんだ。つまり私は王様、奈津美は召使いという事になる」
「私はただのバイトです」
「バイトは王様よりも偉いのか？」
「働かない王様より、一生懸命働くバイトの方が偉いですよ」
「王様ってのはな、何が何でも偉いんだよ。王様より偉いのは神様ぐらいだ」
「そういう事では無くてですね」私は脱線した話を戻す。「私の用があって来たんでしょ」
「おお、そうだった。用があるんだった」相川は指を鳴らす仕草をするが、鳴らない。
「で？　その用っていうのは」
「ここに村上って苗字のやつ、いるか？」
「むらかみ？　ああ、村上ですか。村上なら」私は指を指す。「あの人ですよ。今レジをしている」
私は長い髪を後ろで結んでいる彼女に指を指した。
村上は私と同じ時間帯のシフトで働いている。彼女は私の前から

バイトとして働いていた。最初の頃は教育係として、指導してもらったことがある。
彼女は同じ大学の同期らしい。らしい、というのは実際に彼女から聞いたわけではないからだ。同じサークルの人が教えてくれた。彼女は大学ではそこそこ有名らしい。
確かに、整った顔立ちは同姓の自分から見ても、とてもきれいだと思う。
「なるほど。予想以上に、美人だ」相川が感嘆する。
「で、私に何の用が。それと村上にも」
「お前、一昨日の事は覚えていないのか？」
相川が呆れた顔で溜息を吐いたので、とりあえず、私は一昨日の事を思い出してみる。

「相川さんの淹れたコーヒーは不味い」私はカウンターに座っている従業員の男に向かって言った。「ていうか、相川さんに淹れて欲しくなかったです」
「そんな事はだな、思っていても口には出さないんだよ。お前、もうすぐ二十歳だろ。大人になるとだな、我慢が出来ないと駄目なんだよ」
今、私がいる喫茶店はアンティークな造りをしている。そこらの清潔で殺風景な喫茶店よりも私は好きだった。それに合わせて流れるジャズが気分を落ち着かせる。
「それは言い返せない人の言い訳だと思うんですけど」
「人生をうまく生きるには大切なんだよ。ご機嫌伺いは大人の常識だ。ほら、今からその例を見せてやる」相川は人差し指を立てる。その指を私のいる場所から二席分空けて座っている中年の男性に向けた。「しっかりと見てろよ」
相川は先程の挽きたてのコーヒーをカップに注ぐ。そのカップを

男性の前に置いた。
虚を衝かれた男性は顔を上げる。相川は満面の笑みで、「常連客へのサービスですよ。正さん」と言った。
「え？　ああ」
正さんと呼ばれた男性は苦笑して、ありがとう、としゃがれた声で言った。少し躊躇いながらもカップに口をつける。
正さんというのは私と相川さんが付けた渾名のようなもので、本名は正和さんという五十代のサラリーマンだ。年のせいか、最近はスーツがくたびれているし、声も枯らしている。会社に勤めてもうすぐ二十五年目になる彼はそれなりの地位にいるらしいので、部下に叱責を飛ばしているのだろう。
「営業用の笑顔でよく嫌がらせができますね」私は感心する。
「これはな、心の底からの笑顔だ。正さん、お味のほうは？」
「なんというか、なかなかだね」曖昧な言葉で濁す。
「ほらな。まさに大人の鑑だ」
「正さん。本当のことを言わないと駄目ですよ。『こんなのコーヒーじゃない。色の濃い泥水だ』って」
「いや、さすがにそこまでは」正さんは人の良い笑顔を浮かべる。
「正さんを見習ったらどうだ。社会人一年生」
「はいはい。機会があったらね。それより相川さん、水、下さい」
コーヒーの口直しに私は注文する。相川は面倒臭そうな顔をわざと見せて、グラスを取り出した。
客に向かってそんな顔はないだろう。先程自分で言っていた客へのご機嫌伺いはどうしたのだ。
「なあ、相川君。例の件が上手くいっていないんだ」しばらくして、正さんが口を開いた。「君のアドバイスがふざけているとしか思えなくなってきたよ」言葉とは裏腹に、棘がある言い方ではなかった。
「正さん。物事にはね、例外がつきものなんです」相川がグラスに氷を入れながら、言った。
「君が言うとね、言い訳に聞こえるのが不思議だ」

「何の話をしているんですか？」
私はふたりに訊ねた。仕事の話をしているように見えるが、年が倍近く離れていて、職種も全く違う相川に助言を求めるというのは、少しおかしい気がした。
「いや、そのね」言いづらいのか、正さんは口をもごもごさせる。
「あ、別に話しづらいならいいんですけど」
「そこまで大事な話ではない」相川が代わりに答えた。
「私にとっては大事な話だよ」正さんが珍しく、声を荒げる。
まあまあ、と相川は正さんをなだめる。
「まあ、正さん。気長に待つ事が大事ですよ」相川は落ち着かせるような口調だった。「私と奈津美も協力しますから」
「は？」私は眉間に皺を寄せる。
「本当か」正さんの顔が輝く。「奈津美ちゃんも協力してくれるのか」
「ええと、その」
そんな顔をされると、断りづらい。
「実は、さっきその件をこっそり話してみたらですね、快くＯＫをもらったんですよ」相川が平然と嘘を並べる。
「そうか。そういえば」正さんは合点がいった様子で「奈津美ちゃんは涼子と同じコンビニでバイトしていたんだっけ」と言った。
「リョウコ？」リョウコって誰だ？
それより私は不審に思ったことがある。「というか、何で私がコンビニでバイトをしているって知っているんですか？」
「前に相川君が教えてくれたよ？」
「それでも、私は相川さんにも言った覚えは無いですよ」
そう言うと正さんも怪訝な顔になった。私と正さんは同時に相川を見る。
相川は肩をすくめる。「小さい事は気にするな。ほれ、水」

「私の記憶が正しければ、相川さんから何も聞かされていませんよ。正さんもその後すぐに帰っちゃったし、私もバイトがあったので」
「そうだっけ？」相川はとぼける。「奈津美がぼけている可能性もあるんじゃないか？」
「十代の記憶力を、なめないで下さい」
「都合のいい時は十代なんて言葉を使いたがるよな、十代って」
「三十路手前の負け惜しみですか。大体ね――」
相川をまくし立てようとした時に後ろから「おい津村」と知った声が耳に飛び込んできたので、背筋がしゃんと伸びる。
「店長」おそるおそる振り返ると、四十前後の眼鏡を掛けている男が腕を組んでいた。細くつり上がった爬虫類のような目で、細い体つきだった。
「俺ははやる気の無い奴に給料を払うつもりは無い。お前でも言っている意味ぐらい分かるだろ」出来の悪い学生を諭す先生のような口調だった。
「すみません」
「俺は謝れとは言った覚えは無い。行動で示せよ、行動で」
「すみません」壊れかけの録音機のように繰り返した。
「お前の代わりなんて、世の中に腐るほどいる」
店長はそれ以上何も言わず、自分の仕事に戻っていた。今日はあっさりと退いたな、と内心でほっとする。
私は店長が苦手だった。理由としては、確かに指摘は正しいが、粘着質な嫌味をずっと言われるのは我慢がならない。常にこちらを圧迫してくる高圧的な態度もある。
「なんだ、あの粘着質なトカゲ野郎は」相川は内緒話をするように、私の耳元で囁く。「ああいう野郎は部下には威張り散らすが、上司には徹底的に媚を売るタイプだ。いってみれば、私と違って小心者だな」
相川の人間予想はあながち外れてはいなかった。店長の口癖は「お客様は神様」で、どんな理不尽なクレームも謝り続けているのを

見たことがある。
「初対面でそこまで悪く言える人も珍しいですけど。何で小声なんですか。もっと大きな声で喋って下さいよ」
「あのな、そうすれば、あいつに聞こえているかもしれないだろ？」
「はいはい」私は適当に切り上げる。「それじゃ、相川さん。話は仕事が終わってからにしましょう。また注意をされるのは嫌ですから」
「仕事が終わるのは何時だ？」
「そうですね……」私は店内にある時計を見る。午後八時を少し過ぎていた。「二時間後ぐらいですかね」
「そうか」そう言うと、相川は歩き出す。
「どうするんですか」
「とりあえず、先にこなしておく事がある」
「こなしておく事って？」
「村上を、口説く」
「は？」
彼が何を言っているのか、その時は分からなかった。

泥舟に乗る方が現実的

外から窓が小さく叩かれた。私は外を覗く。暗くて、よく見えなかった。私が呼ばれていることは分かっているので、店の外に出る。一瞬、店長の顔が頭にちらついたが、気にしない事にする。コンビニの中と外の気温差が激しく、私はあまりの寒さに身震いをした。

窓を叩いた本人の顔が街灯に照らされ、ほんのりとその輪郭が浮かび上がる。よく知っている、五十代の中年男性だった。

正さんはスーツの上から革のジャンパーを着ている。

「正さんも来たんですか。今日はコンビニで何かあるんですか」

「私も、という事は、相川君は来ているんだな」今日も少し声が枯れていた。

「ええ、あそこで」私は店内を指差す。ガラス越しだったが、はっきりと見えた。

「何をしているんだ？」

「店員を口説いています」

「は？」正さんも、私と同じような反応をする。しかし、すぐに納得した様子で、「ああ。そういうやり方か。彼らしい」と言った。

「正さん。その事についてなんですが」私はとりあえず状況を確認する。「私、詳しい話聞いていないんですけど」

「そうだっけ？　奈津美ちゃんが覚えてないだけじゃないかな」

「十代の記憶力は凄いんですよ」私は苦笑する。「だから教えてくれませんか」

正さんは少し思案する。そして「ああ、いいよ。ここまで来たら奈津美ちゃんも乗りかかった船だしな」と教えてくれるようだった。

「乗せられた船ですけどね」

正さんはこれまでの経緯を教えてくれた。相川に相談したことや彼からのアドバイス、今後の予定など。聞き終えた私は「ああ」と

うなずいていた。
「奈津美ちゃんはどう思う」
「乗せられた船が、泥船だった気分ですよ」
私はそんな事が出来るとは到底、思えなかった。泥船で漁に出ろ、と言われる方がまだ現実的だと思えた。
「でも、私はその船しかないんだ。奈津美ちゃんは協力してくれるのか？」
彼の目は真剣だった。そんな彼に、無理だとはっきり言えなかった。
それなら、相川の突拍子な行動にも説明がつくが、私には真似できない。「コンビニで店員を口説くなんて、非常識だ」
「確かに。見ている私のほうが緊張する」
正さんはコンビニの中を覗いているようだった。私もそれに見習い、コンビニを見る。
すぐに相川が出てきた。首をかしげ、腕を組みながらこちらに近寄ってくる。失敗したんだな、とすぐに分かった。
「で、どうだったんですか。口説き落とせましたか？」私は自然とからかうような口調になっていた。
「いや、気持ちがいいほど、きっぱりふられた」
「そうか」正さんが残念そうに呟く。「私はもう帰るよ。明日は会社がある」
私達に背を向け、帰っていく姿はどこか寂しそうだった。
「正さん」相川はその背中に声を掛ける。「体調、崩さないよう気をつけて」
正さんは振り返り、苦笑して、帰っていった。
そんな彼を見送って、私は相川に訊ねる。
「相川さんはどうするんですか。一応、明日も村上とシフトが一緒ですけど」私は暗に協力してもいいですよ、と相川に告げる。「相川さんはどうするんですか？」
「今日はきっぱりふられたからな」相川は笑って、私に言った。「

明日も、頑張れそうだ」

「奈津美さん、ちょっと」商品の数量チェックを行っていた私の肩を、村上が叩く。

私は不覚にも驚いてしまった。村上から話しかけられるなんて、指導を除けば今までになかったからだ。

「えっと、どうしたの。村上」私は断りもなく彼女の名前を呼び捨てにしていた。呼び捨てにした方が打ち解けやすいのだと、考えたからだ。

「あの人と知り合いなの？」彼女の口調は事務的で、取調べをする刑事のようだった。

「あの人？」

「私にナンパをする、あの人ですよ。何日も前から」

「ああ」相川さんの事か。

「この前、店の外でその人と奈津美さんが話しているのを見かけたから」

「ああ」相川はふられる度に毎回私を呼び出す。そして、何がいけないのかと私に聞いてくるのだ。私は「唐突過ぎるのがいけないんじゃないですか」と言った。すると相川は「ナンパなんてそんなもんだろ」と言い返してきたので黙るしかない。

「奈津美さんは知り合いなの？」同じ台詞を繰り返す。刑事が確信を得た上での質問に近かった。

「知り合いじゃないよ。ただの客」私は白を切る。犯人の様な気分だった。

ここから質問攻めにあうな、と覚悟をする。

その時、店内に笑い声が響いた。

笑い声がするほうに首を巡らす。
二人の十代の男だった。二人とも髪を染めており、ひとりは茶髪、もう片方は金髪だった。雑誌置き場の前で座りこみ、漫画雑誌を片手に笑い合っている。それほどその雑誌の内容が面白いのだろうか、と気になるほどだった。
「嫌な客だな」私は呟く。
彼らのような客は珍しくはなかった。ああいうのは常識がない。自分が客というだけで、好き勝手やってもいいと思っているのだ。だから、私は注意する事に気が進まなかった。経験上、嫌な顔をするのは当然で、逆に言い返される事もある。「店員の分際で客に口出しするな」と。
確かに店員と客では客のほうが立場は上だが、人間としては一緒のはずだ。
このまま見てみぬふりをするか、無駄だと分かる注意をするかを考える。
すると、私の横を誰かが通り過ぎた。村上だ。彼女は金髪らの所に迷いなく歩んでいく。
「ちょっと、あなた達」村上はやはり二人に声を掛ける。「騒がしい。他の客に迷惑をかけないで」
「何だよアンタ」金髪が村上に向く。
「別に俺らはただ喋っているだけだろ。店なんかに迷惑はけてないだろうが」茶髪が言った。
「一番迷惑しているのは店じゃなくて、客よ」
だが、二人が反省している様子はまるで無い。
「細かいこと言うんじゃねぇよ。つうか、俺らも客だぜ。なあ」
「そうだぜ。アンタこそ客に迷惑をかけるんじゃねぇよ」
また大声で笑う。下品な笑い方だった。
そこで、私はある事に気付く。村上の手が、こぶしを作り、震えている。そこで怒りを紛らわしているつもりだろうが、こちらから見て分かるほど、怒っているのが分かる。今にも、殴りかかりそう

でもあった。
まさか、このまま本当に殴りかかるんじゃないだろうか、と半ば本気で思った。そうすれば、金髪たちが反撃するのは当然で、華奢な彼女が抵抗など出来るわけがない。私が村上に加勢しようが変わらない。相手は男がふたりだ。
私は村上に近づく。
「村上、相手にするのはやめよう。店長を呼んだほうがいい」
落ち着いた声で、彼女をなだめるように言った。彼女を二人から離そうと、手首を掴む。しかし彼女は意外に力が強く、私の手を強引に振りほどいた。
「いい加減にして」村上は金髪を睨みつける。「私は黙れと言っているの。あなた達が口を閉じさえすれば出来ることなの。なんでこんな簡単なことも出来ないの」
金髪は黙らない。「いちいちうるせぇなあ。自分が下らないと思わないのか、アンタ」
「あなたにこんな事をいちいち説明しているこの瞬間だって思っているわ」村上が言うと、金髪は不愉快そうに顔を歪めた。
「てめぇ調子に乗んじゃねぇぞ」
茶髪が怒鳴った。今から殴りますよ、と教えるように指の骨を鳴らす。ドラマで不良が喧嘩をする前に行う儀式のようなそれを現実で見るのは初めてだった。
「村上！」
私はさっきよりも強く彼女の手を掴む。村上がこちらに勢いよく顔を向ける。金髪と同じように私を睨んだ。
彼女の目は私を責めるようでもあった。だが、村上の意思に構わず、むりやり引っ張る。不意に後ろに引っ張られた村上は踏ん張りが利かず、よろける。そのまま彼女を引きずるようにその場から離れようとする。
「おい待てよ」金髪が素早く村上の肩を掴んだ。顔を近づけ、口を歪ませて笑った。「逃げんのかよ」

その瞬間、私は村上が空いていた右手を大きく振りかぶったのを見た。
「あっ」思わず声を出す。そのまま右手を振り下ろし、金髪の右頬をとらえる。パン、と小気味のよい音が鳴った。
金髪が小さく呻く。あまりにも突然の事だったので、茶髪は呆然と立ち尽くしていた。私も思わず立ち止まってしまう。
金髪は右頬を擦りながら顔を上げる。しばらくして自分が引っ叩かれたのだと気付くと、頭に血を上らせた。
「てめぇ！」
同じく金髪が大きく右手を振りかぶる。先程と違う点は、平手打ちではなく握りこぶをつくっていた事だ。
その時、人の駆けて来る音がした。金髪の背後から軽快に足音が鳴る。
金髪が腕を振り下ろす前に、長身の男が羽交い絞めにしていた。
長身の男はよく知っている顔だった。相川だ。目で私に合図をする。
今度こそ、引き離すために駆け出した。

私と付き合って

私は、スタッフルームにある時計を、なんとなく見る。先程のいざこざから、二十分程経っていたのが分かった。
二十分経った今でも、店長は金髪たちに頭を下げていた。二十も歳が離れている若者にあそこまで腰を低く出来るのは、店員の鑑だ。他の客はいなかった。そろそろ日付が変わる時間という事もあるが、金髪らが怒声を撒き散らしていたので、それで気分を害して帰っていったのだと私は考える。
金髪らはどうでもよくなったらしく、店の悪口を言いながら帰っていった。その背中に、謝罪を述べる店長は正直、情けないと思った。店長がすぐにスタッフルームへ直行する。
今、この部屋に私と村上、店長と何故か相川がいた。部屋はそれほど広くないので、四人もいると窮屈に感じられる。何でこの人がいるんですか、と村上は私に目で訴えるが、説明できないので無視する。店長が相川について何も言わないのが不思議でならない。
「村上。お前がやった事、分かっているのか？」
「客を殴った」店長の遠回しな言い方に、村上は即答した。
「そして俺がお前の代わりに謝った」店長が語気を荒げる。「店長の俺が、ただたかバイトの、お前の代わりに」
「何で謝ったんですか？」
「は？」意外すぎる言葉に、私と店長は同時に、間の抜けた返事をした。
「何で、店長は謝ったんですか？　何も悪くないのに」
村上はもう一度、同じ事を言った。私としては、村上はどこか大事な螺子が緩んでいるのではないかと思えた。
店長はさらに怒鳴るわけでもなく、逆に呆れた顔になる。
「お前が、お客様を殴ったからだよ。神様を殴ったも同然だ」
「それが悪い事だとは思いません。あいつらの方がひどい」

「神様を殴ったのにか？」
私は、村上が金髪を殴った理由がひどく単純な気がした。若者特有の、「引っ込みがつかない」とか「ダサいと思われたくない」だのといった単純な理由だ。
「あいつらがだらしないから、殴ったって私は悪くないですよ」
「なあ、村上」静かに事の成り行きを見ていた相川が、口を開いた。
「え？」
「少し、黙れ」静かだが、よく通った声で相川が言った。
意外な声音に、村上の顔が強張る。爬虫類に睨まれた小動物のように、身を縮ませた。
「自分がやった事を正しいと出張するのは立派だがな、それには責任と覚悟があって、初めて成立するものだ。責任と覚悟も無くただ喚いている奴ほど、見苦しいものはない」
「で、でも」
相川は続ける。「お前はどうだ、村上。店長と奈津美、そして客に迷惑をかけた。それだけだろ」
村上が押し黙る。彼女に纏わりつく空気が重くなったように、苦しそうに動かなかった。こんなに弱々しい彼女を見るのは、初めてだ。
村上が顔を上げる。一瞬、私を見た。
どこか申し訳なさそうで、今にも泣き出しそうな表情が覗けた。
「最後まで責任取れよ」
村上は、相川に向かって力無く、うなずいた。

「少しは落ち着いた？　村上」
「……ええ、落ち着いた」
私と村上はバイトを終え、帰る途中だった。普段は一緒に帰る仲で

はないのだが、正さんの頼み事もあり、彼女がひどく落ち込んでいたこともあったので、一緒に帰ろうと申し込んだのだ。
夜の十二時を過ぎていたが、町はまるで今からが本番だと出張するように、活気づいていて明るかった。アミューズメントパークの看板が休むことなく輝き続けている。
「奈津美さん。私が、間違っていたと思う？」
村上が弱く呟く。顔を下に向け歩く姿は、小さく見えた。
「分からない」私は曖昧に答えた。客を無視した私と客を殴った村上。どちらが正しいなんて分からなかった。いや、きっとどちらも正しくないのだろう。
「私ね、高校の時に、両親が離婚しているの」
村上が顔を下に向けたまま、私に言った。
「そう」
「離婚の理由、何だと思う？」
「夫の浮気？」私が考えられるのはそれくらいだ。
「惜しい」村上は勿体振るわけでもなく、「母親の不倫」とすぐに言った。
浮気も不倫も、似たようなものでしょ、と言いたくなる。
「それなのに、今、私の苗字は母親の姓。笑えるでしょ」
「離婚の原因を作ったのに？」
「その時に父が、とても情けないと思った」情けない、の部分を強調する。「多分、ろくに自分の意見が言えなかったんだと思う。ずっと、尻に敷かれていたから」
「でもさ、その父親は村上のことを考えて、譲ったんじゃないの？親権」私は聞いた言葉をそのまま、言った。「自分ひとりで養うより、母親とその不倫相手の方が幸せになれると思ったんじゃない？」
「結局、情けないでしょ。自分じゃ自信が無いから、人に押し付けるって」私も、そう思う。
「本当の事がどうであれ、もう会うことはないしね」

そこからしばらくは、互いに黙って歩いた。
夜の冷気は肌をひんやりと包み込む。肌を撫でるような弱々しさが、心地よかった。
好ましい寒さが私の頭を冷やしてくれたのか、今日の事が鮮明に蘇り、そして、自分を冷静に見つめることが出来た。
村上を叱りつけた相川の言葉を思い出す。彼の言葉は村上だけでなく、私の胸にも深くつきささった。「責任と覚悟の無いやつほど見苦しいものは無い」それによれば私は、見苦しい奴になる。
私は、正さんからの頼み事なんて、少しでも力になれればと思っていたのだが、本当にそれだけだと気付いた。実際、たいした力にもなれていない。
正直、頼み事など、どうでもよかった。あの時、断っておけばと後悔すらしていた。
しかし、それ以上に、自分がとても見っとも無い人間だと自覚した。責任も覚悟も無く、中途半端に協力するなんて、自分の善行に酔っている偽善者だ。
だから、私はなけなしの責任と覚悟をかき集めて、行動することを決意する。
確か、彼女はここから数キロ先の駅を頻繁に利用しているはずだった。なので、ゆっくり話をする時間は、ある。
私は息を吸って、沈黙を破った。
「村上はさ、自分が情けない父親と違うってこと、証明したかったんじゃないの」
「えっ」村上が目を見開く。図星のようだ。
「だから、舐められないように、金髪たちに立ち向かった」
「何を言っているの」村上が苦笑する。動揺を隠すようだった。
「ねえ、村上。明日、暇？」
「さっきから、急に何なの」村上は眉をひそめる。
「明日は木曜日だけど、村上は何か講義、入れてる？」
「木曜日は何もないけど。そう言う、奈津美さんは？」

「二コマ入っているけど、サボるつもり。ねえ」私は続ける。「明日、私に付き合ってくれない？」

コーヒーは泥水

「おはよう、村上」
「……おはよう」眠そうに村上が挨拶を返す。
私はなるべく友好的な笑顔で村上を迎えた。公園にある背の高い時計を見ると、朝の十一時時過ぎだった。
私は駅から少し離れた場所にある公園のベンチに座っていた。その横には、愛用しているオレンジの自転車がもたれている。
村上がいつもこの公園を横切ってバイトに向かっている事を相川から聞かされていたので、互いに分かりやすい場所だと考え、待ち合わせの場所にしたのだ。
「本当に来るとは、思わなかった」約束をすっぽかされるんじゃないかと思っていたので、ひとりで映画を観にいく予定を立てていたのは、内緒だ。
「誘った本人が何を言っているの」
「確かにね」私は立ち上がり、自転車を立て直す。「それじゃ、行こうか」
私達は公園を出て、川沿いに歩く。犬の散歩をしている主婦や、ジョギング中の女性を見かけた。すれ違いざまに、挨拶を交わす。
村上は小さく、頭を下げる。
「どこに行くつもり？」村上が訊いた。
「喫茶店。朝ごはん、まだでしょう？」
「奈津美さんが、抜けって言ったから」
「でもその前に自転車止めておきたいから、この先の広場に行こう。そこなら、駐輪場ぐらいありそうでしょ」
川から逸れて大きな道に入る。平日の昼間はやはり人が少なく、目に映ったのは営業中のサラリーマンや暇をもて余した大学生ぐらいで、犬の散歩やジョギングをしている人は見当たらなかった。
「あ」

私が声を発したのは、広場の象徴でもある噴水の一部が見えてきたのと同時に、広場の方から歌が聞こえたからだ。それとギターの音も。男の、しゃがれた声が、唄っている。
「誰が、唄っているんでしょうね」
「さあ。広場から聞こえるのは確かなんだけど」
私達は広場に向かいながら、きょろきょろと辺りを見回す。そうしているうちに、広場に着いた。
広場は、噴水以外には目立ったものがなく、ベンチぐらいしかなかった。しかも、昼間の噴水はそういう仕様なのか、水は湧き出ていない。植樹すらもされていないので、殺風景だった。
「あの人じゃないですか？　あの黒づくめの」村上が指差す。
探すのに時間がかかるのかと予想していたが、意外とあっさり見つけられた。
広場は、床のタイルや噴水は白でしか塗装はされていなかったので、全身を黒で統一している男は風景から浮かび上がっているので、すぐに見つけられた。帽子とサングラスをかけているので、顔はよく見えなかったが、皺が深く刻まれているのは分かった。
噴水の塀にもたれてギターを弾きながら男は昔にヒットした洋楽を唄っている。いや、唄うというよりは喚き散らしている、といった方が正しい。周りに喧嘩を売るような演奏は、見物人を遠ざけるようだった。お世辞にも、上手いとは言えなかった。
「あの人、見た事ある」村上が言った。
「え、どこで」
「一ヶ月ぐらい前に。バイト先の近くで演奏していたのを一度だけ。その後、苦情があって警察に注意されて、それ以来見なくなったんだけど」
「じゃあ、一ヶ月前から唄い続けているんだ。それはすごいんじゃない」私は本当に感心した。
「いや、多分その間休んでいたんじゃないですか」
「いや、毎日唄ってたんだよ。きっと。だから、声を枯らしている

んだ」
「そうですかね」村上が男から興味を失ったように目をそむけ、辺りを見回す。「あれじゃないですか、駐輪場」
村上が広場の出口に指差す。そのそばに、寂れた確駐輪場が確かにあった。
「ええ、その通り」私は駐輪場に向かって、自転車を押した。

私は古びたドアを景気よく開ける。それに応えるように呼び鈴が鳴った。店内は相変わらずがらがらで、相川が暇そうにカウンターに肘をついていた。
「いらっしゃい」けだるそうに言った。「おっ、村上か。生きていれば珍しいことも起きるもんだな」
相川の言葉に前の気まずさはなかった。村上は「どうも」とぎこちなく返事をする。
「相川さんは今日も暇そうで」
「人生は楽も苦も味わうさ。だから、今は退屈を味わっている最中だ」
相川が私にメニューを渡す。メニューにあるのは、どれもありきたりなものばかりだった。
「私はエッグサンドウィッチと紅茶で。村上は？」
私は村上に注文を唆す。彼女は少し考え、「じゃあ、同じものを。飲み物はコーヒーで」と言った。
相川はカウンターの向こう側に消えていった。それを見計らって、村上が私に訊ねる。
「相川さんがこの店の店長なんだ？」
「うん。ひとりしかいないけどね。意外だった？」

「そりゃあ、ね。だって私、奈津美さんからはただの客と聞かされたし、何度も口説かれたし」
「それって、自慢？」私は苦笑する。
相川が経営していると分かったら、そのまま帰ってしまうのかと予想していた。何度もしつこく、口説いているうえに、勝手に叱りつけている。罵声を浴びせられてもおかしくはないと思っていたのだが、やはり警戒心は滲ませてはいるが、嫌なわけでもなさそうだった。
「なんというか、落ち着く。いい店ね。あの人にはもったいない」
「そう。本当にもったいない」私も激しく同意する。
二十分が経つと相川がトレイを持って出てきた。私たちのテーブルに置いていく。エッグサンドウィッチを二人分で、何故かコーヒーも二人分だった。
「相川さん。これ何」私は泥水に指差す。
「コーヒー」
「私、頼んでいないんですけど」
「今回は上手く出来た自信があるんだ。常連客へのサービスだよ」
「余計なサービスだ。ここに通うの、やめようかな」
村上がそのやりとりに苦笑する。彼女は、サンドウィッチを齧り、コーヒーを啜った。
「村上。味のほうはどう？」私は訊ねた。彼女なら、はっきりと感想を言ってくれるだろう。
「うん……まあ、なかなか」
あれ、おいしいのか？　私はカップを手に取り、おそるおそる口をつける。
そして、思い切り顔をしかめる。「やっぱり、不味い」
「人はそう簡単に変われんよ」相川が得意げに言った。口には出さないが、腹立たしい。
「村上なら、はっきり不味いと文句を言うと思ったな」
「そう？　でも、いきなり不味いというのも、失礼でしょう」

「こいつは最初から泥水と言ったぞ」相川が口を挟む。
「村上って、少し変わったね。やっぱり昨日の事で」
「ええ、まあ」二口目のサンドウィッチは大きく齧った。「昨日、相川さんに叱られたこと、ずっと考えていたの。そしたら」
「そしたら？」
「私はとんでもなく見苦しいやつ、ってようやく気付いた」村上は不味いコーヒーを啜る。「このままだと駄目だって。もう大人なんだから」
「いや、別に村上は悪くない」相川がまぜてくれ、といわんばかりに会話に入ってきた。
「え？」
村上は目を瞬かせる。私は、いまさらそれはないだろうと言いたくなった。
「あいつらの方が悪いさ。マナーがなっていない奴らは見ていて腹が立つ。だから、村上。今度コンビニに金属バットを寄付してやる。どんなにひ弱な奴でも金属バットを持っていれば、相手は逃げ出すさ」
「はあ」村上が返答に困る。
「それに悪いのは村上の父親もだ。駄目親父」
「駄目親父って、相川さん」そんな言い方はないだろう。
「親父が恰好いいところを見せれば、娘が危険な目にも遭わなかった。自分が情けないところしか見てもらえなかったから、こんな事になったんだ」
「確かに」
相川の言葉には何の根拠もないが、説得力があった。実際、あの時相川がいなかったら村上は大変な目に遭っただろう。
「さっきも言ったが、人はそう簡単に変われない。だが、それは自力の場合だ」世界の理を説明するかのような響きがあった。
「相川さんの淹れるコーヒーがいつまでたっても不味いのは教わる人がいないから？」私は茶化す。

「ようやく、分かったか。まあ、それは置いといて」相川は箱をそばに置くような仕草をする。「村上。最近、父親と会ったか？」
「いいえ。でも前に電話がかかってきました。『会いに来てくれないか』って」
「返事は？」
「会うつもりは無かったので『かっこいいところ、見かけたらね』って言いました。無茶な注文ですよね。会いに来ない相手に、かっこいいところ見せるなんて」
「無茶ではない。村上が会いに行けば」
「それ自体が無茶な注文ですよ」
「人が簡単に変わるには誰かを模範にするしかないんだ。そして、その模範になるのは大抵、親だよ」相川は続けて言った。「私がコーヒーをおいしく淹れるのと、村上が父親に会いに行くの。どちらが現実的だ？」
「その二つしかないんですか」村上が苦笑し、残ったサンドウィッチをまとめて口に入れた。

冬の寒空に

外に出ると、空が茜色に染まっていた。私と村上は喫茶店を出た後、せっかくなので一緒に買い物をすることにした。彼女は一人暮らしをしているらしく、食材や調度品を買いたいと言ったので、ショッピングモールで時間を潰していたのだ。

「暗くなってきましたね」村上の両手には、買い物袋がぶら下がっている。

「それじゃ、そろそろ自転車取りに行こうか」

私達は広場に向かう。

すると、聞き覚えのある唄が聞こえた。私と村上は互いの顔を見合す。自然と早足になった。

広場に着くと、昼間にいた黒づくめの男が唄っていた。ギターを持って。昼間と同じように。

お世辞にも上手い演奏とは言えない。だが、何も恐れずに、自棄を起こしたように前に進んでいくような気迫があり、年老いたロックンローラーの様な貫禄があった。

「こうやってじっくり見てみると、印象が変わるね」

「確かに」

私達は近くにあったベンチに腰を下ろす。演奏している彼の手は休むことなく、動き続けた。そのメロディに歌をのせる。それが、私の体を揺らす。

「かっこいいね」村上がぽつりと呟いた。

「そうよ。かっこいい」

私は本当に気付かないものだと驚いていた。その人が普段から全く違う行動をするだけで、こうも印象が変わるものなのかと。

「ねえ、奈津美さん。私、父と会う事にする」

「え？」

「でも、その前にこなしておく事がある」

「こなしておく事って？」前にも似たような台詞を言ったな、と思い出す。
「責任を、取る」彼女は笑っていた。

「おい、まだいるぜ。コイツ」茶髪が村上を指差す。
「普通クビにするだろ。客に手を上げる店員なんてなあ。あの店長は何考えてんだろうな。バイトをクビに出来ないぐらい腰抜けってことかな」
金髪らがニヤニヤしながら顔を近づけていく。村上の顔が強張った。
「ここの店長は腰抜けだぜ。俺らのような年下に何度も頭を下げているからな。客を殴るバイトに腰抜け店長、最悪だな」
「……弁当はあたためますか」村上は無表情のまま、言った。
「あたためるに決まってんだろ。いちいち客に言わせるんじゃねぇよ」
「すいません」頭を下げる。
私と相川は遠くから離れて、眺めていた。
既に見慣れた光景だった。これが彼女なりの責任の取り方らしい。
「不器用なやり方だな」それを見た開口一番の相川の台詞だった。
言葉とは裏腹に、褒めているようだった。
「でも、そろそろ止めませんか？」
「そうだな」そう言う相川は動く気配がない。
私は溜息を吐く。「このままだと、村上はずっとまとわりつかれると思いますよ」
「それは、店長の責任だろ」
「店長は、どう責任を取るんでしょうね」
「さあな。でも、今からおもしろいものが見られるかもしれないぞ」
私は最初それが何の事なのか全く分からなかった。
しばらくすると、眼鏡を掛けた男が出てきた。店長だ。

「おっ、腰抜け店長。今日もご苦労様です」
「今日も、なんか用すか？」ひどい言われようだな、店長。
店長は無造作に金髪に近づく。頭を下げるのかな、と分かりきっていたつもりだが、今回は違った。
「あ」私は思わず声を出す。村上も目を大きく開いたのが分かった。相川はにやけている。
店長が思い切り金髪を殴ったのだ。殴られた金髪は、予想外の衝撃にうずくまっている。
「てめぇ」茶髪が怒鳴る。が、店長が片手に持っていたものを見て大人しくなった。
彼が持っていたものはコンビニにあるはずがない、金属バットだった。
「今までは我慢してきたが、重要なことに気付いたよ」店長の声は、自信に満ちていた。「ここは俺の店だ。だから、俺が神様だ」
茶髪が金髪を引きずり、逃げる。店長が金属バットを振り回しながら、追いかける。外に逃げても執念深く追いかけていった。
店に残された私と村上と相川は、何故だか無性におかしくなった。金髪らの情けない姿も、店長が甲高い声を出しながら追いかける姿も、愉快だった。
「奈津美さん」村上は遠くにいる私に大声で呼ぶ。笑いを堪えているのか、すこし声が震えていた。「私、責任とれましたかね？」

二週間後、村上はバイトを辞めた。今の仕事よりも、もっといい場所を見つけたらしい。今はそこで働いているそうだ。
私は変わらずにコンビニで働いている。最近、身近で変わった出来事と言えば、金髪たちを一切見なくなったのと、スタッフルームに金属バットがあるぐらいだ。
ある日、村上から電話があった。「父と会う日が決まったんだけど、一緒に来てくれない？」

「何で、私が」
「ひとりじゃ心細いから。それに、相川さんも来るから、誘えって」
私は何となくその理由が分かった。だから、私はＯＫの返事をした。私がまだ頼みごとを果たしていない責任があったからだ。
待ち合わせ場所は、あの殺風景な広場だった。
いや、殺風景ではなかった。昼間は分からなかったが、柱や枯れ木にイルミネーションが施されており、それらの光は花が咲き誇っているようだった。夜の広場は、噴水が機能していた。照明に照らされ、湧き上がる水はきれいで、躍動感があった。昼間と違って夜は人が行き来していて活気付いていた。
そこにはいつもの様に中年の男性は中央にある噴水の塀に腰を掛けて演奏していた。前に来た時よりもときよりも人は多かった。家路に急ぐサラリーマンや学生のカップルが何となく、といった様子で彼を中心に集まっている。
「これじゃあ、すぐにお父さんを見つけるのは難しいですね」村上が辺りを見回す。
「そうね。こんなに人がいるなら、よく顔を見ないと分からないかも」私も同感だった。
「だったら大きく手を振ってみたらどうだ、村上。そうしたら、向こうは気付くかもしれない」
「いいアイディアです、相川さん」
私達はそこから少しだけ離れたベンチに座った。
噴水はライトに照らされており、水飛沫がそれに反射する。そんな風景をバックに演奏する彼はどこか神秘的だった。
「かっこいいな」これは本当に、正直な感想だった。
「……そうですね」村上が同意するよう、呟いた。
「父親と、ここで待ち合わせしているんでしょ」
「ええ、そうです」村上は落ち着かないようだった。「久々に会うから、緊張しちゃって」
「まあ、とりあえず落ち着こう」相川が暢気に言った。「コーヒー

を魔法瓶に入れて持ってきたけど、飲むか？」
「結構です」私と村上は同時に答えた。
その時だった。男は演奏を急に止めた。私と村上はそれに気付き、すぐに視線を男に戻す。彼はこちらを見ていた。いや、見るというよりも凝視していた、の方が適切かもしれない。村上は眉をひそめる。
「何で、こっちを見てるんでしょうね」村上は眉を顰める。
「きっと、待ち合わせの人を見つけたと思うよ」
「ああ、きっとそうだ」
「え？」
男は立ち上がった。彼は帽子をとり、サングラスを外す。素顔が露になる。そして「涼子！」と叫び、大きく手を振った。
村上はじっと彼を見つめた。そして、「お父さんだ」と零した。
「どうして」村上がゆっくりと口を開く。目の前の状況を少しずつ、確認しているようだった。
「行ってきたら？　言いたいことや聞きたいこと、色々あるでしょ」
「え、ええ」私の言葉を素直に受け止め、彼女は父親の元にゆっくりと近づいていった。
「長かったな」相川が私に言った。「それにしても、本当にこんな事で親子が仲直りなんてな。三文小説の様な話が、現実になるとは思わなかった」
「私もです。泥船でも、意外といけるんですね」
私はさらに深くベンチにもたれかかった。三週間前の出来事が昨日のように鮮明に思い出す。たった三週間で、色んな事が変わった。世界なんて、自分が変われば簡単に変わっていくものなんだと実感した。
私は肩の荷が下りたので、爽快な気分だった。だから、次に相川が発した言葉も、軽い気持ちで返事をしたのだろう。
「コーヒー、飲むか？　上手いぞ？」
「本当に、美味しいんですか」

「ああ」
「だったら、少しだけ」
魔法瓶から湯気とともに黒い液体がカップに注がれる。私はそれを両手で持ち、火傷しないようにゆっくりと飲んだ。
「おいしい。なんで？」思わず訊ねてしまった。
「ここ最近な、バイトを雇ったんだ。そいつが意外に、コーヒーを淹れるのが上手かった。そいつが、私に教えてくれたんだ」
「へえ、熱心なバイトですね」
「そいつが私に言ったんだ。『私はこの店を続けさせる責任と覚悟がある』って。そいつなりの、恩返しなんだろう」
私は村上を見る。なんだ。口説かれたのはまんざらでもないんじゃないか。
夜空を見上げる。今年の二月は大変だったよと愚痴ってみた。すると、冷たい風がそれに答えるように吹く。それが「とりあえず、頑張れ」と元気付けているように感じて、思わず笑ってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1128l/

冬の寒空に

2010年10月8日15時22分発行